
Life of Vampire

鏝籠玲志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L i f e o f V a m p i r e

【Nコード】

N 7 9 6 4 C

【作者名】

鏹籠玲志

【あらすじ】

生まれたばかりに両親を失い、本当の血の飲み方がわからないヴァンパイア。悲しく、孤独なヴァンパイア。そんなヴァンパイアの人生がある日、180度変わる。

第0話：序章

生まれたばかりのヴァンパイアは、正しい血の飲み方を知らない。

ヴァンパイアの世界では、少しだけ頂戴するというのが正しい飲み方。

物心が付いた頃に、両親、もしくは血縁者に教えてもらい、修練の末に習得するのである。だが、彼は

彼は、とある建物の屋根にいた。

人々は寝静まり、「ゴク、ゴク、、」という音だけが妙に響く午前2時。

その音が鳴り止むと同時に、彼は叫んだ。

「つつつはあ！！！」

うめえ、やっぱうめえなあ！！綺麗な月夜に、新鮮な血。最高ー！！」

彼は、そう言いながら抱えていた者を乱雑に置いた。

それは・・・人である。いや、血の気が完全に失せている死体だ。

「夜明けはまだまだだな。こんなに気分がいい日はいろいろ飛び回るしかない！！」

んー・・・ヒャーツホー！！！」

彼は生まれたばかりに身内をすべて失った、悲しい悲しいヴァンパイア。

この話は、そんなヴァンパイアの話である。

第0話：序章（後書き）

あなたも、ヴァンパイアが住む世界に踏み入れましたね。
では、彼のこれからの一生を、一緒に見ていきましょう。

ただし・・・彼には見つかつてはいけませんよ。

彼に見つかれば・・・あなたの血は、一滴も残りませんから・・・。

ホラーではありません。

第1話：黒羽藍

「ん・・・ふぁー・・・。よく寝たなあ。腹減ったし、今日も狩りに行くかあ。」

久々に獲れないかなー・・・。最近は失敗ばかりで、木の実ばかりだし・・・。俺はベジタリアンじゃねえっつもの。」

木の上で愚痴っている彼の名は、黒羽藍^{くろはね あい}。

女のような名前だが、15歳の男。

実はこの男、生まれたばかりに、両親や祖父、祖母、その他血縁者を皆、目の前で殺されている。

時は冬。午後10時。空には月と星が綺麗に主張しあっている、素敵な夜。

藍は、そばに置いているいくつかのビン^{ビン}を腰にぶら下げながら言った。

「ああ。もう、1ビンしかないや。」

狩りが終わったら血も採りにいかなきゃ。」

血が2/3ほど入っている、ビール瓶ぐらいの大きさの透明なビン。藍はそれを一気に飲み干した。

飲み干した。なぜ血を？

・・・だって、ヴァンパイアだもん。

「ふー・・・よっしゃ。行くか。

でも、瓶詰め of 血じゃいまいち気合が・・・

新鮮な血の、こう、体にびびびびつとくる感じないし・・・

まあ、寝起きだし我慢しよう。

狩りが終われば・・・パーティーだ・・・!!」

訳の分からないことを言いながら、藍は狩りの用意をする。用意と言っても、ナイフを腰に差しただけだが。

そして腰を左右にねじったり、準備体操のようなものを始めた。

それが終わると、すーっと大きく一息吸い・・・息を止める。

・・・シュツッ、、

そんな音がしたと思えば、その場には、落ち葉が舞っているだけであつた。

第2話：狩り

ガサ、ギャーギャー、、バサバサ、、

とある山奥の森に、藍はいた。木々に覆われた、真っ暗な闇の中。なぜか目を瞑って、じっとしている。・・・獲物の気配を探っているのだ。

「いた・・・！次は逃がさない！！」

そう静かに言い、サツツと走り出す。
素早く、だけでもそっと。

だんだんと獲物に近づいてきた。どうやら、川で水を飲む鹿らしい。近づくにつれ速度を落とし・・・攻撃できるまであと少しのところ、一度止まり、隙をうかがう。

ここまで来ると、ほんの少しの音さえ許されない・・・。
そして。

「ああああ！！！！」

藍は全力で目の前の鹿に向かって茂みから飛び出し、ナイフを振るう！！

・・・ナイフは宙を切り、鹿は逃げた。

藍はガクツと崩れ落ち、嘆いた。

「う、うう・・・。今度こそやったと思ったのに・・・。

もう見つかんねえよー・・・。

・・・・・・・・ん??・・・え??」

藍は目を疑った。そして、少しの間が空いた後、

「え・・・・・・・・ええええ!?!?!?」

藍の目の前、川の向こう側に・・・罨にかかった先ほどの鹿。
なんと、驚いた鹿は、山の麓ふもとに住む人間が仕掛けていた罨に掛かっ
ていたのである。

なんとという幸運。藍は大喜びで鹿を罨からはずし、捕まえた。

・・・忍び寄る影にも気付かず。

「はっ、はっはっは!!!俺に掛かれば、狩りなんてこんなもん
だ!

全く、俺ってば頭いいんだからあゝ!!

あっはっはっはっ・・・」

「たなぼたのくせして、よく言う。ヴァンパイアの恥だ。」

第3話：出会い

「誰だ!？」

藍は、後ろの人物に言った。

「お前と同族だ。唯一の仲間、とても言おうか。」

「は？同族？唯一の仲間??

・・・てことは、あんたヴァンパイア!？」

「ああ、その通りだ。ずっとお前を探していた。ついてこい。」

そのヴァンパイアは、一方的に藍をどこかへ連れて行こうとした。

「あ、うん。

・・・って、ばか!」

ノリツツコミ・・・へたくそである。

「なんで名前も知らない奴についていかなくちやいけないんだよ。

俺は今からこの鹿を、俺が捕ったこの鹿を!!食うんだから、邪魔しないでくれよ。」

「最近、この街の人間の血を飲んでるのはお前だろうか？

人間はその事で酷く怒り、怯えている。」

「そんなの関係ないだろう？人間なんて、ヴァンパイアにとってはただの餌じゃないか！

どうしてそんなに餌の事を気にするんだ？

・・・あ、自分の餌を取るなって言いた、」

「本当のヴァンパイアの世界、生き方。今のヴァンパイアがどうなっているか。すべて教えてやる。黙ってついてこい。」

もしこないなら・・・ここでお前を殺す。」

本当のヴァンパイアの世界。生き方。藍にとって、魅力的な言葉だった。藍には、そういうことを教えてくれる人がいなかった。

ただ、幼い頃から血を飲むところを見つかる度、「ヴァンパイアだ」と言われた。

藍が自分をヴァンパイアだと自覚したのは、ただそれだけの事。

だから・・・藍には、それを教えてくれるという事が、すごく魅力的だったのだ。

「わかった。」

第4話：ヴァンパイア

藍は、名も知らぬヴァンパイアに招かれ、その者の家であろう場所に居た。

と言っても、こういう話にありがちな、墓場や地下や場違いな豪邸なんかではない。

街のはずれにある、ただただ普通の一軒家だ。

「まあ、適当にくつろいでくれ。

そして、真剣に聞いてくれ。」

「待てよ待てよ、――！！そろそろ名前ぐらい教えてくれないか？」

もつともである。

藍は、この男に出会い、そしてこの家に着くまで、名前すらも教えてもらってなかった。

無用心にもほどがある。

「ん・・・それもそうだな。すまない。

俺は、ひるい緋^{あや}涙 赤夜だ。なんとも呼んでくれて構わん。」

「あやつて・・・俺より女つぽいじゃないか・・・。」

赤夜は、藍を睨みながら言った。

「・・・以後、女つぽいは禁句だ。」

「そ、そんなに睨むなよ・・・。」

俺は藍。黒羽藍だ。」

「お前の名は知ってる。なんてったって、お前は俺を除けば唯一の生き残りなんだ。」

赤夜は、溜め息混じりにそう言った。

「え．．．？」

「やはり知らなかったか．．．。これから、すべてをお前に話す。なにかあっても、途中で口は出すな。質問は後だ。わかったか？」

「わ、わかった。」

藍は、一方的な赤夜に若干の嫌悪感を抱きながらも、頷いた。

「ヴァンパイアは．．．約3年前に、俺とお前以外が滅んだ。なぜだか分かるか？」

「．．．。」

「我々は昔から、人間とは真逆の闇の世界。夜の世界で生きてきた。だから、人間と出会ってしまうことなど滅多に無かった。」

だが30年ほど前から、人間は我々の生きる世界に。我々が活動する時間にも姿を現すようになった。

そして、我々の血を吸う場面が幾度と無く目撃されるようになり．．．
・後に、ヴァンパイアハンターと名乗る人間が姿を現し始めたのだ。

「

「ヴァンパイアハンター．．．？」

「ヴァンパイアハンターは、我々を片っ端から殺した。そして、最終的に・・・俺とお前が残った。これが、今のヴァンパイアだ。分からないところ、あるか？」

「待てよ。なんで返り討ちにしてやらなかったんだよ？所詮、人間だろう？」

「あんな奴ら、」

「藍。我々ヴァンパイアが1番恐れるものは何か・・・分かるか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7964c/>

Life of Vampire

2010年10月10日18時12分発行